底辺３人組！？

日高 マドカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
底辺３人組！？

【Ｎコード】
Ｎ３１７９Ｆ

【作者名】
日高　マドカ

【あらすじ】
勉強、恋愛、友情、部活。最近うまくいかない３人。そんな３人がなんと！！！！？

底辺だけど　いいじゃん？（前書き）

私も美術部なんですょ（照れ））↑意味不

底辺だけど　いいじゃん？

「はぁー…」
小さい溜め息をもらす。
部活が終わり、
私は美術室を出る。
右手にはカルトン（絵を挟み入れる板）を持つ。
大きくて持ちにくいカルトンを
今日は残念ながらお持ち帰り。
最近　全然絵の進みがよくない。
「さよなら」
「…さょなら……」
後輩は目も合わさず
小さくつぶやいて通り過ぎる。
「今年の1年、態度悪いょねー…」
流数（リカ）が横で　つぶやく。
　私達には、
不穏な毎日が渦巻いていた。

「これは…」
「やばいね…」
「ぁー…」
「どうしよ」
「…」
私と流数と
眼鏡がトレードマークの美砂は
それぞれのテストを眺める。

４２
５４
３７
ありえない数字が並ぶ。
１００点満点のテストが、
見るも無惨な点数に…
勉強。
耳を塞ぎたくなる言葉だ…

絆に火がつく、燃え上がる、

「ウチらって…本当　底辺組だよね…」
「どーいう意味？」
「底辺に下はない。底辺が１番下だからね…」
「あー　なるほどー」
……
「アンタ何　他人事みたいに言ってんのょーーー」
美砂が流歌に掴みかかる。
「私もなのー！？？？」
おいおい何を言ってるだベイビー
流歌も底辺に決まってるじゃないか」（ー〜、；）「
　わぁーーーっ
流歌と美砂がわぁわぁ騒ぐのを
私は呆然とみつめる
「…くだらね…」
ドンッ
左肩に強く衝撃を受け、
振り向く。
「手島…」
そこにいたのは、
手島　大介［テジマ　ダイスケ］だった。
手島は、
「おっと　ゴメン」
と言いかけた言葉を
私の顔を見るなり
途中のまま飲みこみ。
「なんだよ。梛喜［ナギ］か謝って損した」
とか言って

明らかに私を挑発する。
イヤイヤ謝ってねぇだろ？
途中でやめただろ？
ってツッコミは　このさい無しにして、
売られた喧嘩は買うコトにした。
「レディーに対して失礼じゃなくて？」
手島は鼻でフッと笑う。
「どこにレディーがいるのかね？」
と　にやつく。
すると、
流歌と美砂が出て来る
「「ココにいるょー♪」」
でしゃばりめ。
「どこがだ？」
手島の手厳しい言葉で会話が途切れる。
「じゃ、俺。
女の子に追われてるんで♪」
ひらりと手をふり、
手島は遠くへうせる。
ドゴォォォォ
新館の校舎が鈍い音をたてる
穴があきそうな音だったが
校舎はビクリともしない。
「モテるからって…」
「調子にのりやがって」
「ふざけんのも」
「「「たいがいにしろー！！」」」
ムカツク
べつに女扱いされなかったコトに
ムカツいてるんじゃない

ただアイツの
…アイツの人を小馬鹿にした顔に
私達はムカツいてるんだ！！！！

この時だった。
私達に火がついたのは。

事故して変わる♪

「でも、どうにもならないよねー」
「うーん」
「まぁ、結局は格の差だもんね」
流歌が小さく言う
「そうだけど…」
流歌の言葉にハイそうですね
なんて言えない。
そんなトコロで引く程
あっさりした性格ではない。
流歌は私の自転車に手をかける
「ちょっ　ねぇ」
「乗せてょ」
「あー私も」
「ハイハイ」
まるでサーカスだね
というツッコミは受け付けないでおこう。
後ろの荷物を縛りつけるトコロに
2人が立つ。
軽くて細身の流歌と
フツーの体型の美砂が乗るには
充分すぎるくらいだった。
そして、3人乗りをして下校する。
シャーーー
車輪の音が響く。
その音の中に怒声が混じるのに気付いたのは
だいぶ後だった。
「やっぱ伊藤が追ってるょ！！」

美砂の声に振り向く。
そこには、うちの学校の先生　伊藤Ｔが
車で私達を追っていた。
あちゃー　と溜め息するも
そうは言ってられないコトに
すぐ気付く。

息を飲む。
やべぇスリルありすぎ
「「「面白ーい♪」」」
３人は声が重なり
ハッとする。
「やっぱり？」
「だって、面白すぎなんだもん」
「だね♪」
「じゃあ、行きますか」
「「Ｙｅｓ！」」
テンションが上がる。
「俺は誰だ？」
「「椰喜ー」」
「俺達は誰だ？」
「「天下無敵の美術部員でーす」」
馬鹿だと笑われるだろうけど
それでも良いんだ。
だって、全てを馬鹿だと拒絶したら
私達がしてるコトも友情ごっこになるんでしょ？
「しっかり掴まれ」
「「イエッサー♪♪」」
自転車は小道にそれる。
伊藤Ｔの車は、

やむをえず通りすぎる。
まんまと逃れた私達は、坂を下る。
すると　後ろから
「コラー」
という怒声に襲われ、
またまた小道にそれた…というより
小道に飛ばされ
コケた。
ガシャーン
痛いコトには痛いが
コケるコトなんて
しょっちゅうあるから
そこまで痛くないしケガもなかった。
「痛たたた」
「あー最高♪」
今のドM発言は流歌だな
と条件反射で思うが、声が違うコトに気付いた。
「頭クラクラするぅ～」
なんだろう
何かが全体的におかしい。
チカチカしていた目が正常になってきた
「「「ハ？」」」
声が重なる。
何これ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3179f/

底辺３人組！？

2010年10月9日21時43分発行